

## 住宅型老人ホーム利用者の暮らしの安全と自由について

近年高齢者は増え続け、日本の高齢化率は上がっている。私達も年を重ね、いずれは日常生活に支障をきたすようになると考えられる。そこで現在注目されているのが住宅型老人ホームである。研修を行い、一口に住宅型老人ホームといっても施設によって特色はそれぞれ異なっていることが分かった。まず初めに、見学を行った「住宅型有料老人ホームエスプリ鹿児島あいら」「特別養護老人ホームマモリエあいら」「小規模多機能ホームさざんか」の三つについての比較と考察を行う。

まず、「住宅型有料老人ホームエスプリ鹿児島あいら」の考察を行う。この施設は要介護1から5の方が入居でき、個室や食堂、ラウンジ、デイサービスがある。強みとしては、まず、定期的に入居者の家族と連絡を取り合っている点である。入居者の方の様子を伝えることはもちろん、施設で行う行事の連絡や入居者が欲しがっている日用品などを伝えることで、入居者と家族が直接会う機会を増やすことを目的としている。次に、イベントを開催して地域の住人と交流を図っている点である。研修時に行った夏祭り企画では、子どもから大人まで多くの方が施設に集まった。閉鎖的になってしまいがちな施設の中で、外部からの刺激を取り入れることで入居者に活気を与えているところに魅力を感じた。この施設の問題点としては、個室の壁が薄い点である。少し声をたてると隣の部屋まで聞こえる。隣の人の寝言で目が覚めてしまうということもあり得るだろう。また、上の階の足音が直に聞こえてくるとも問題であると考えられる。特に高齢者は足が不自由な方も多く、足音の調整をすることは難しいだろう。騒音が入居者同士のトラブルに発展する可能性を考え、常に他者を配慮して生活せざるを得ない点に、生活の不自由さがあると感じた。

次に、「特別養護老人ホームマモリエあいら」の考察を行う。この施設は要介護3以上の方を対象にしており、長期入所と短期入所に対応しているユニット型の指定介護老人福祉施設である。この施設の強みは、施設内で家の「外」と「中」という空間を演出している点だ。「中」では一般的な介護施設と同様にキッチンや個室、共有スペースがある。また、玄関や靴箱といった家としての要素を取り入れている。一方で、「外」では室内に植物や石の配置、図書館を模した本棚の配置、美容院の設置等、施設で過ごす前と変わらない環境を提供している。新聞を読む入居者のためにポストを設置し、自分で新聞を取る楽しみを大切にしたいとおっしゃっていたことが印象的だった。また、テレビや時計、部屋の表札を車イスの目線の高さに設置している点は、入居者の生活しやすさを考えていると感じた。その人がどう過ごしたいのかを重視し部屋に置く家具の制限を設けていないところや、食事やその後の行動を時間で縛ることなく自由に過ごさせるという考え方に、開放的な印象を抱いた。喫茶店スペースでお金のやり取りを許可していることや、映画館に行く為に座るリハビリを行っている等、外出を前提にした行動

を勧めていた。今までの暮らしと同じ環境を望む方にとっては魅力的であると感じた。問題点としては、廊下や風呂場の風通しが悪く暑いところが挙げられる。広い施設の為に冷暖房を設置することは難しいが、入居者に快適な空間を作るのであれば必要であると感じた。

最後に「小規模多機能ホームさざんか」の考察を行う。この施設は通いも宿泊もできることが特徴である。利用者も約二十名と少数制をとり、一人一人にまんべんなく目を向けられるようにしている。この施設の長所は、ホームにこない日や休んだ日に訪問し、安否確認を行うところである。利用者が地域で孤立しないようにする配慮を感じた。また、社会福祉法人が多数の事業を運営しており、近くにグループの保育園がある点もメリットだ。子どもと遊ぶことで全体の活気に繋がると考えられる。短所としては、小規模多機能という性質上、利用者を増やすことができない点が挙げられる。家の大きさは一般家庭ほどであり、利用者が増えると狭くなるからである。また、家族のような関係性をコンセプトにしている為、利用者同士の相性が最も重要になると考えた。

このように、施設の種類によって利用者への接し方が異なっていることが分かった。暮らしの自由という点に着目し共通して言うことができるのは、施設内では他者の存在を感じながら過ごしているということである。このことで他者との生活によって日常生活で刺激を受け取り、職員もいる為生活する上で身体的な不安要素を緩和することができる。また、社会問題としての孤独死を防ぐことも可能になる。他者と積極的にコミュニケーションを取りたい方には最適な環境だ。しかし、一人で過ごすことを好む高齢者にとってはストレスになってしまうだろう。いきなり他者と暮らすことになった時、生活リズムが合わず気疲れしてしまうと考えられる。その点では、「特別養護老人ホームマモリエあいら」の入居者の生活スタイルを大切にしている方針は優れているといえる。また、介護職員の責任の重さについても言及したい。人手不足と言われている介護職員は、夜勤を行う際に一フロアにつき一人という体制で働いていた。他の階に職員がいるといっても、命を預かる仕事として一人で責任を負うことは負担になると考えられる。研修先で介護施設の経営支援をしている山下さんのお話を聞く機会があった。山下さんによると、現在外国人を介護職員として育成し、日本の介護施設で雇用する流れがあるという。人手不足の解決の糸口になることを期待したい。

一方で、安全面については十分であると感じた。普段の生活では介護職員が歩行や入浴の介助を行い、食事面では栄養士がそれぞれ利用者の健康を考えて献立の議論をしていた。施設では廊下を歩くとセンサーが反応して照明がつくため、夜間の徘徊にも即時に反応できる。ナースコールにより利用者側から助けを求めることもでき、目が届かない時でも安心である。

では、今後高齢化が進む中どうすれば高齢者を孤立させず、かつ個人空間を確保できるのだろうか。私はその解決策として、高齢者用のアパートの建築に力を注ぐことを考えた。近年では地域包括ケアシステムが適用され、地域全体で高齢者を見守っていこう

という方向に向かっている。これからますます少子高齢化が進み、介護職員は人手不足になるだろう。アパートであれば個人空間が与えられ、必要な時だけサービスを受けることができる。そのため介護度の低い高齢者に対しては、呼ばれた時だけ対応することも可能になる。介護職員の負担は軽減され、介護度の高い高齢者に集中することも可能だ。しかし、安全面は不完全になってしまうだろう。個室で倒れてしまった時、助けを呼べない可能性もある。そのような事態に陥らない為に、ナースコールと同様にいつでも連絡できる道具を利用者が常に身につけることや、こまめに連絡を取って元気に過ごしているか確認する必要がある。

日本人は現在平均寿命が延び、老後を不安に思う人々も増えている。多様化が進み、人によって価値観が異なる。多くの選択肢の中でそれぞれに合った生活スタイルを選択できる社会を目指し、明るい老後を迎えることのできる国にしていきたい。